千田貞暁のその後

彼は、宇品港の完成直後、その工事計画に不十分なところがあったとして、給料を減額される処分をうけました。また、突然、新潟県への転任を命ぜられてしまいました。完成後しばらくは、その価値を認められなかった宇品港と同じように、彼の努力もなかなか認められなかったのです。

しかし、宇品港が軍用港としての重要な役割を担ってゆくにつれ、彼の評価も次第に高まります。明治27年（1894）には、宇品築港の功績によって天皇から表彰されました。

彼は生涯に、1府5県の各知事をつとめ、晩年には、貴族院議員もつとめました。亡くなったのは、明治41年（1908）、享年73歳でした。宇品の地に彼の銅像が建てられたのは、その7年後のことです。

彼のいろいろな想いがつまった宇品港は、昭和7年（1932）に広島港と名前を変え、現在では商業港・工業港として、また、広島の「海の玄関口」として多くの人々に利用されています。

千田貞暁略年表

年		内容
天保　7	1836	鹿児島に生まれる
文久　3	1863	薩英戦争に従軍する
慶応　4	1868	戊辰戦争に従軍する
明治　5	1872	東京府典事になる
明治10	1877	東京府大書記官になる
明治12	1879	東京地方衛生会幹事になる
明治13	1880	広島県令になる
明治17	1884	宇品築港がはじまる
明治19	1886	広島県知事になる
明治22	1889	宇品港が完成する
		新潟県知事になる
明治24	1891	和歌山県知事になる
明治25	1892	愛知県知事になる
		京都府知事になる
明治27	1894	宮崎県知事になる
		宇品築港の功績により叙位・叙勲
明治31	1898	男爵を授けられ、華族となる
明治37	1904	貴族院議員になる
明治41	1908	東京にて没する、73歳

<参考文献>広島県編『千田知事と宇品港』（同県　1940年）

学習の手引
第31号

千田貞暁（せんだ さだあき）

千田貞暁肖像写真
（広島市公文書館所蔵）

広島市郷土資料館
〒734-0015　広島市南区宇品御幸2丁目6番20号
TEL（082）253-6771　FAX（082）253-6772

千田廟公園の銅像

広島港にほど近い、広島市南区宇品御幸一丁目に、千田廟公園があります。この公園には、台座の高さを含めると、約9メートルもある銅像（銅像そのものの高さは2.5メートル）がそびえ建っています。銅像は、千田貞暁という、明治時代の前半期に広島県令（県知事）をつとめた人のものです。これは、大正4年（1915）、県令時代の彼の功績をたたえる意味で建てられました。

千田貞暁銅像写真

千田貞暁の名前は、この銅像と公園のほかにも「千田町」（広島市中区）という地名や、「千田祭」というお祭りの名とともに、現在もなお、広島の街に息づいています。

このようなかたちで名前を残した千田貞暁とは、一体どんな人で、どんな役割を果たした人なのでしょうか。

広島県令に就任

千田貞暁は、天保7年（1836）、薩摩藩の武士の子として、今の鹿児島市に生まれました。少年時代は、武士の子供のための学校（藩校）で学問と武芸を学びました。

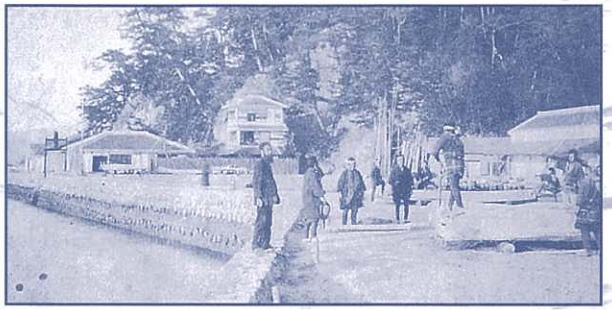
幕末・明治維新という政治が不安定な時期に、青年時代を迎え、戊辰戦争（1868～1869）では、新政府軍の一員として、各地で旧幕府軍との戦いに参加しました。

そして、明治5年（1872）に東京府の職員に就任したのを皮切りに、明治政府の官僚としての道を歩むことになります。広島県令への就任は、明治13年（1880）のことでした。

県令に就任してからは、広島県の発展と県民生活をより良くするための、いろいろな課題に取り組みます。農業・養蚕業・酪農・林業・水産業・工業などの産業を育てるほか、河川や道路の改修、測候所や刑務所の開設など数多くの事業を手がけました。そうした中で、彼が、最も力を注いだのが、広島に港を築くことでした。

宇品築港

彼は、広島の町をより発展させるには、大型船の入港できる港が必要だと考え、宇品に港を築くことを計画しました。その工事は、明治17年（1884）に始まりましたが、数々の困難にぶつかる難工事でした。しかし、彼をはじめとする多くの人々の努力の結果、明治22年（1889）、約5年もの工期と当初の予定を大きく上回る莫大な費用をかけてようやく完成しました。



宇品の作業場で指示する服部長七（左）　【服部憲明氏所蔵】
（明治時代に人造石工法を考案し、これを全国に普及させた土木事業者）

難工事の末に完成した宇品港でしたが、最初はあまり利用されることはありませんでした。しかし、明治27年（1894）の日清戦争以後、兵隊を戦地へ送り出す軍用港としての役割を担うこととなりました。ただ、それは、彼が最初に思い描いていた商業港としての宇品港の姿とは大きくかけ離れたものでした。